

バラケイ

薔薇刑

rosa mu' ei p'ikas.

細江英公寫眞集

被寫體および序文——三島由紀夫



一九六三年

集英社刊 定價三五〇〇圓

killed by roses

photography by eikoh hosoe

model and introduction by yukio mishima







hōō μ' ei' p' r' k' d' s.

To Dennis A. Roach

from Eiko Igarashi

林田 英子



technical data

minolta-sr-1 — rokkor-f1.8-55mm/f2.8-135mm

canon-l3 — canon lens-f3.5-25mm

hulof-color — gymnar-f5.6-210mm/super-angulon-f8-90mm

fujifilm — neopan sr/miniopy film

高感判



定価 二、五〇〇圓

昭和三十八年三月二十日 印刷

昭和三十八年三月二十五日 發行

撮影者 — 細江英公(東京都葛飾区砂町二ノ100)

被寫體および序文 — 三島由紀夫(東京都大田區馬込東一ノ1131111)

協力モデル — 江波杏子/土方巽/元藤禰子ほか

装本および寫眞構成 — 杉浦康平

發行者 — 陶山巖

寫眞・本文印刷所 — グラビア精光社

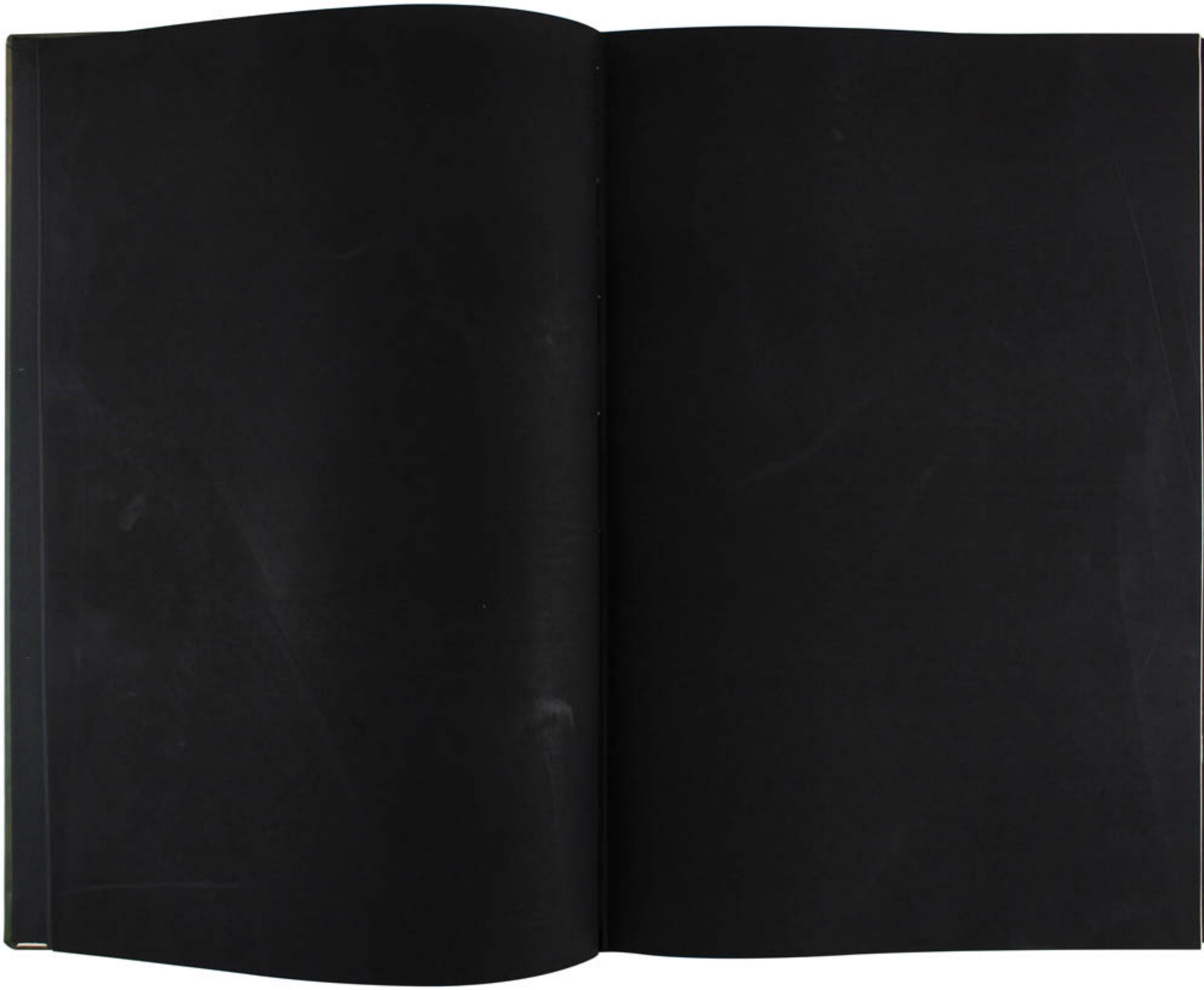
表紙印刷所 — 大日本印刷株式会社

製本所 — 中央精版印刷株式会社

發行者 — 株式会社集英社(東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三)

電話大代表 三〇一—三三三〇番 廣告東京三三六二五番

made in japan



而して

かの蒼穹の上方に

即ち萬有の脊梁 宇宙の脊梁たる

無上至高の靈世界に於て 輝いてゐる光明は

とりもなほさず

人間の體内に存する光明である 其の現像は

現に肉體に觸れた時に透かみを感じる

といふことである——『ニヒルニシテ』

チサード・キマ・ウハニシマツト

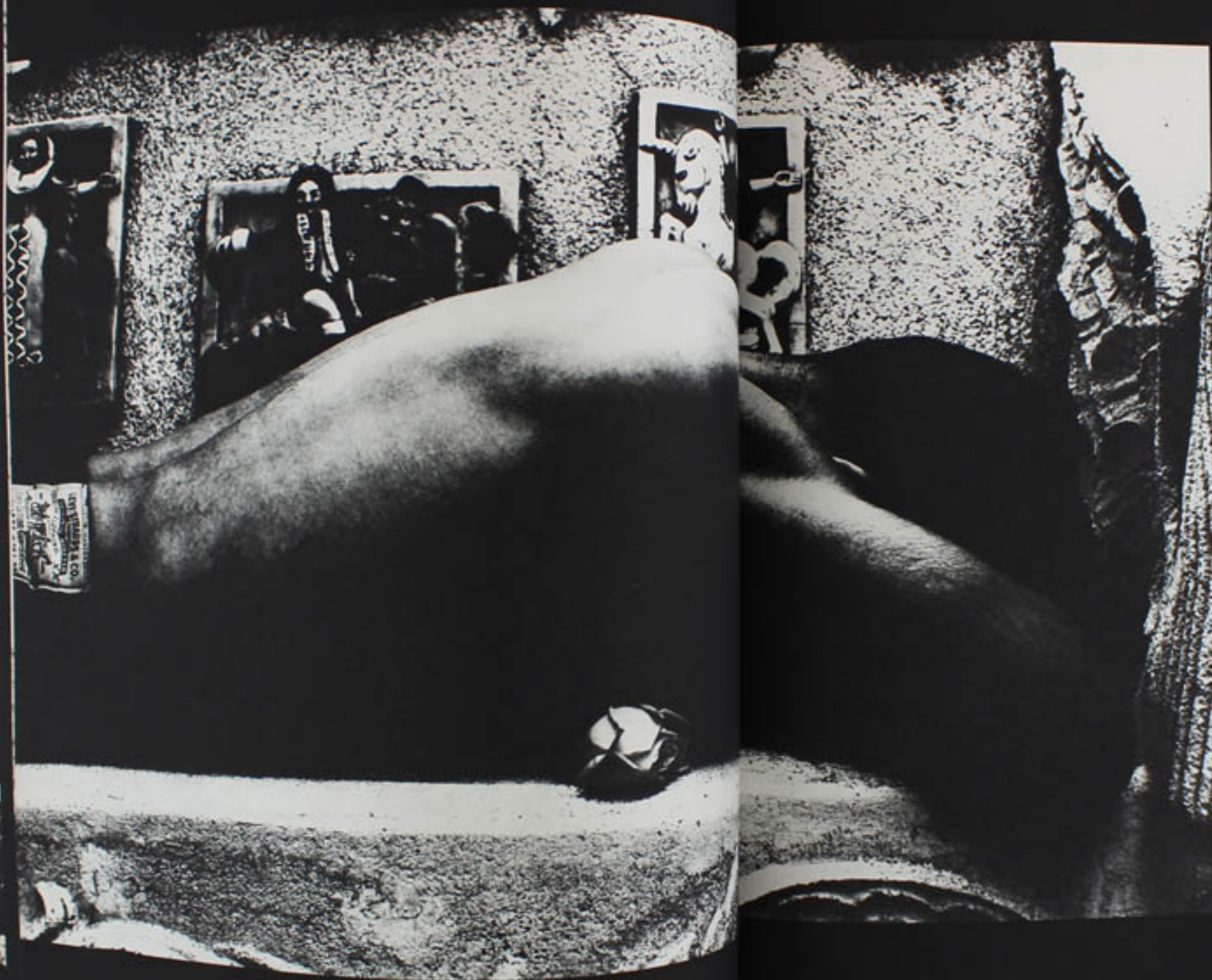
『ニヒルニシテ』







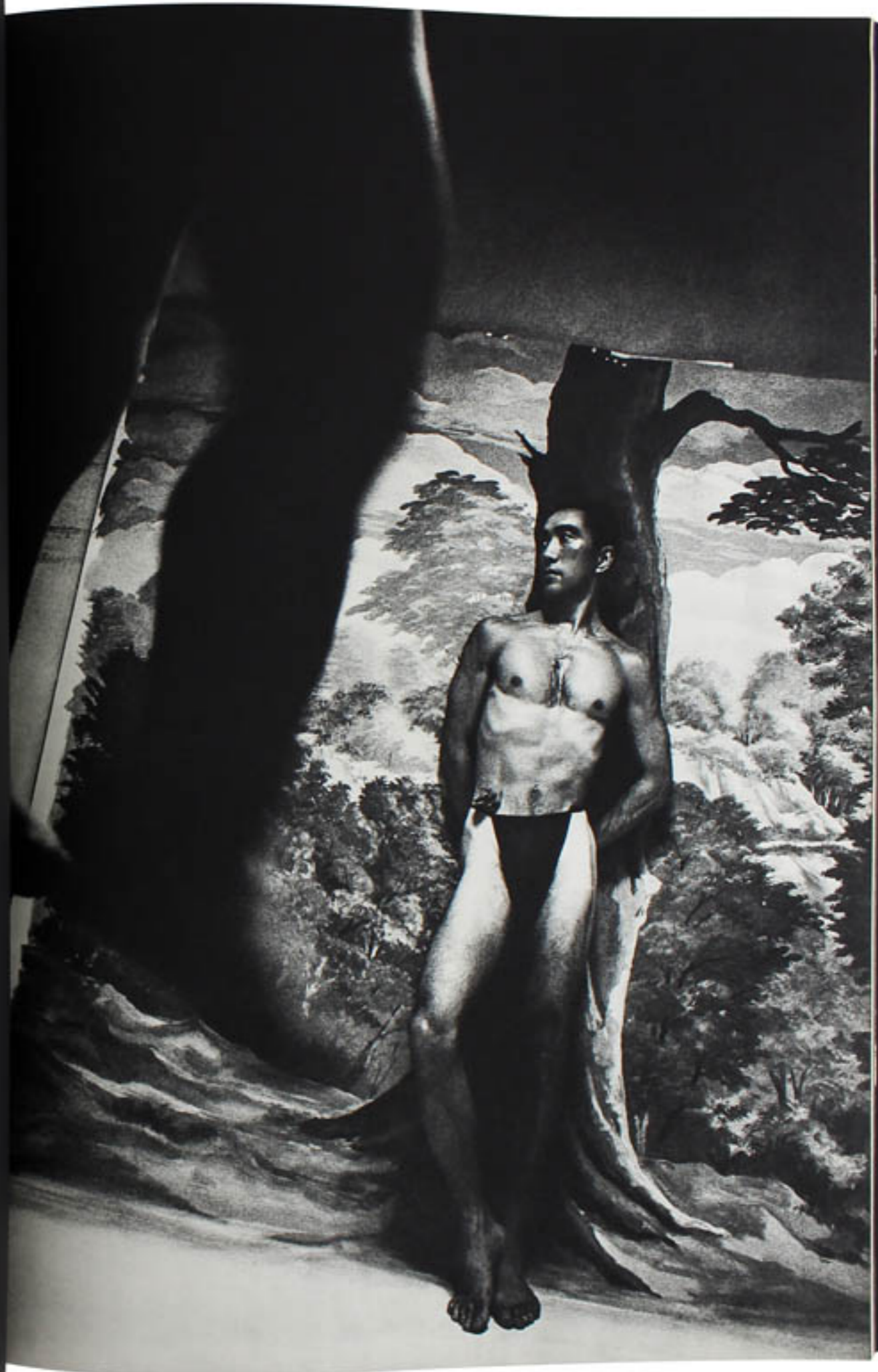
尊者の臥床を犯したる者は、その罪を告白したる後、熱したる鐵の臥床に自らを横たへ、或は赫熱したる婦人の像を抱くべし。死によりて彼は淨めらる。——マコ法の法典 第十二章 殺されたる奴隷の主人は加害者を頭格刑の被告となすとも、或は此法律に依る損害賠償を請求するとも其任意とす。奴隷は自己に人身的損害を被むることなきものと認めらる。然れども、若し此の如きことある場合には、其主人が其者を通じて之を被むりたるものと看做さる。——ローマ法





森の主なる樹木にぞ
人はまさしく似たりけり
髪は樹葉の茂ること
皮膚は樹皮の包むなり
血滴は人の膚ゆ出で
膠液は樹皮より流れ出づ
斬られし人の流す血は
斫られし樹木の膏なるか

フリスバード・アールニツマカ、ウツクニシヤット、民衆の間に傳へし也





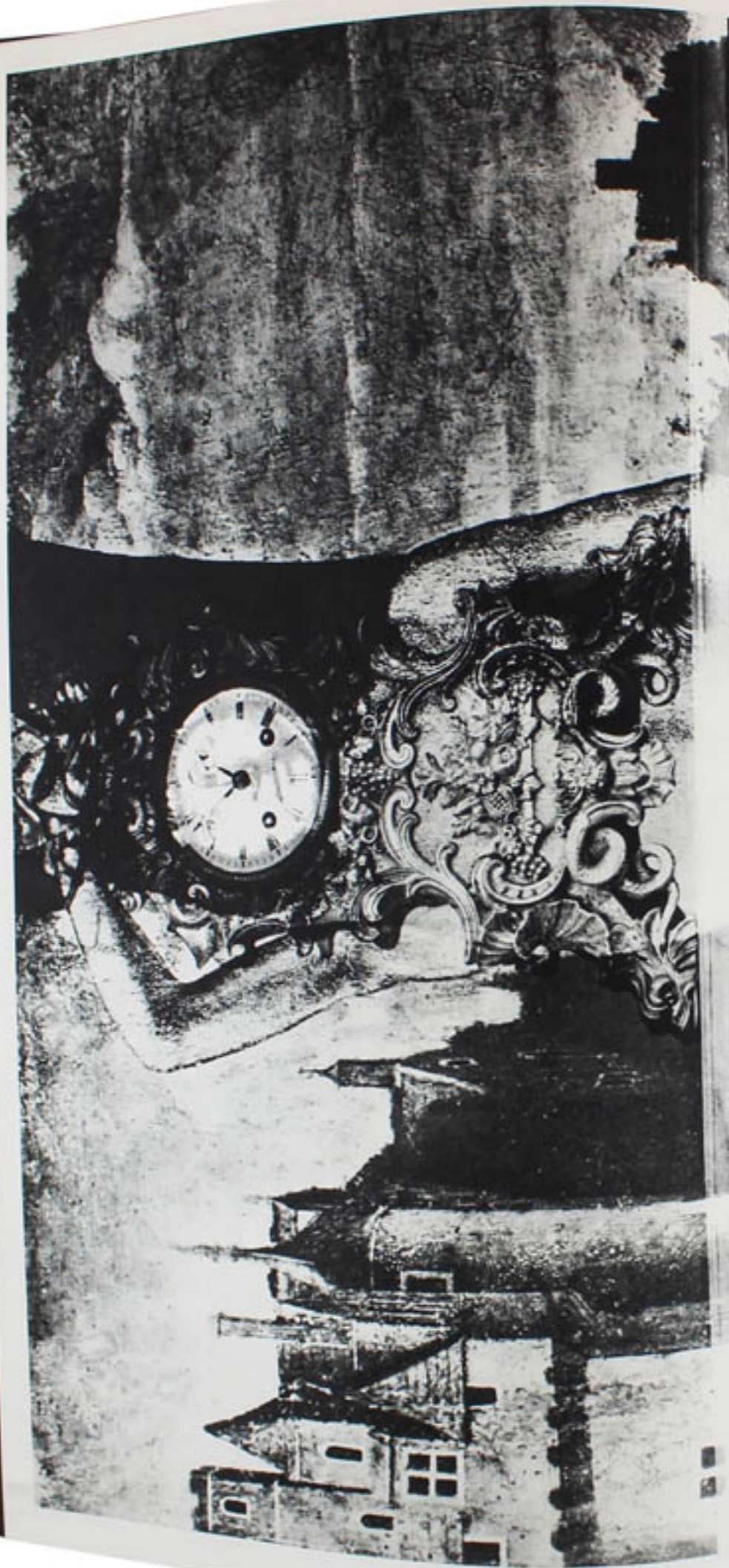
スターダムの家からのは
もつとま 眞習にたり
忠誠と男の力の証、
並瓶香水のうちには
大切に蔵はれたる
彼らの精光を
見出しに
NATURE'S MASCARINE



第五章——蔷薇刑





















第四章——やいまごまな瀆耶王

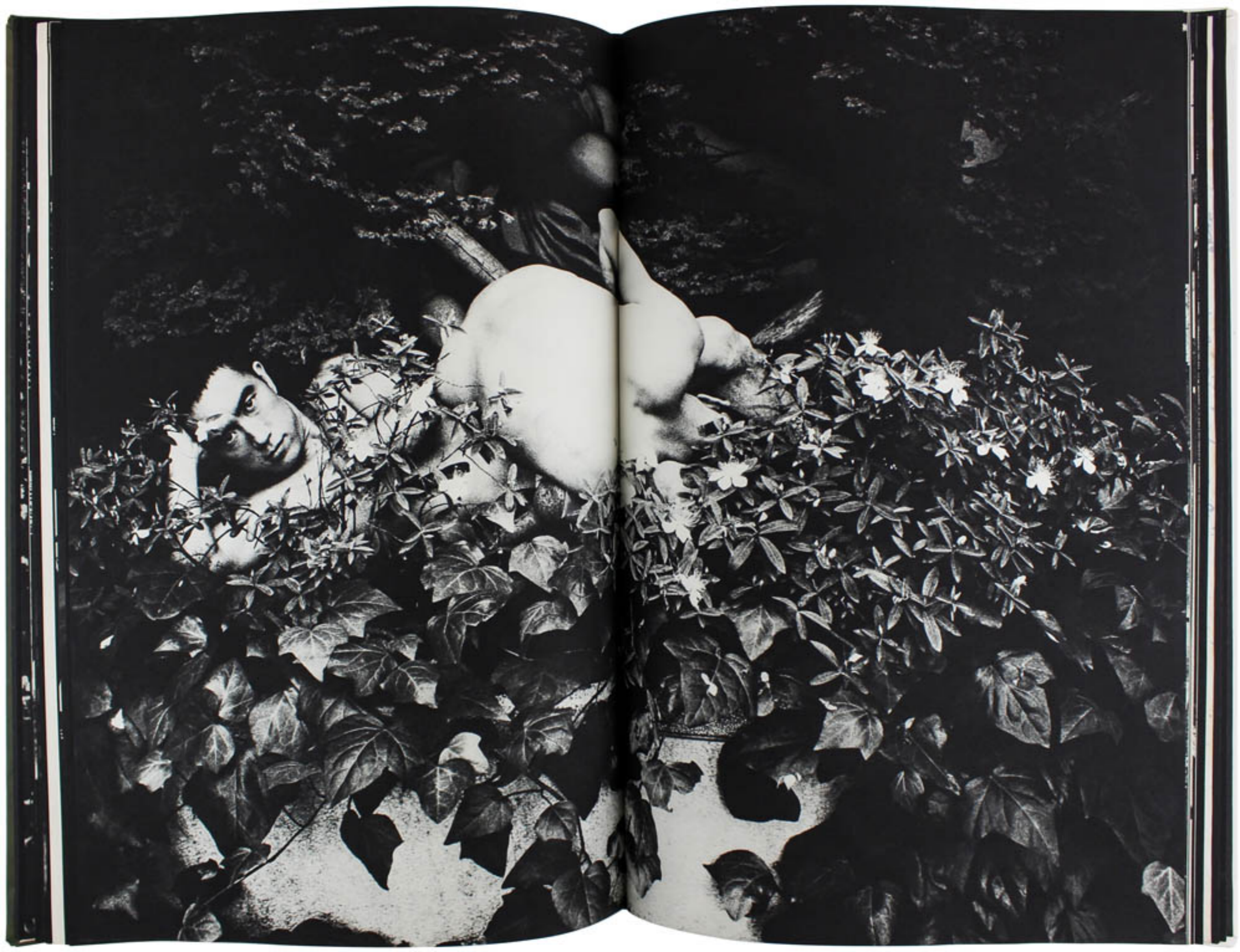




—1970年10月、ハワイ州のビーチで撮影された、アレン・エドワーズの作品。写真家アレン・エドワーズの作品。写真家アレン・エドワーズの作品。

エイ・バルブッティ
ベイシユヤー・セイ
スウホアウシェン
プシエ・ヘイ
パウペー
マショウーヘイ
おが
出た乳肉の女神
女神バルブッティと交際するには
いつかの夢を覚醒する









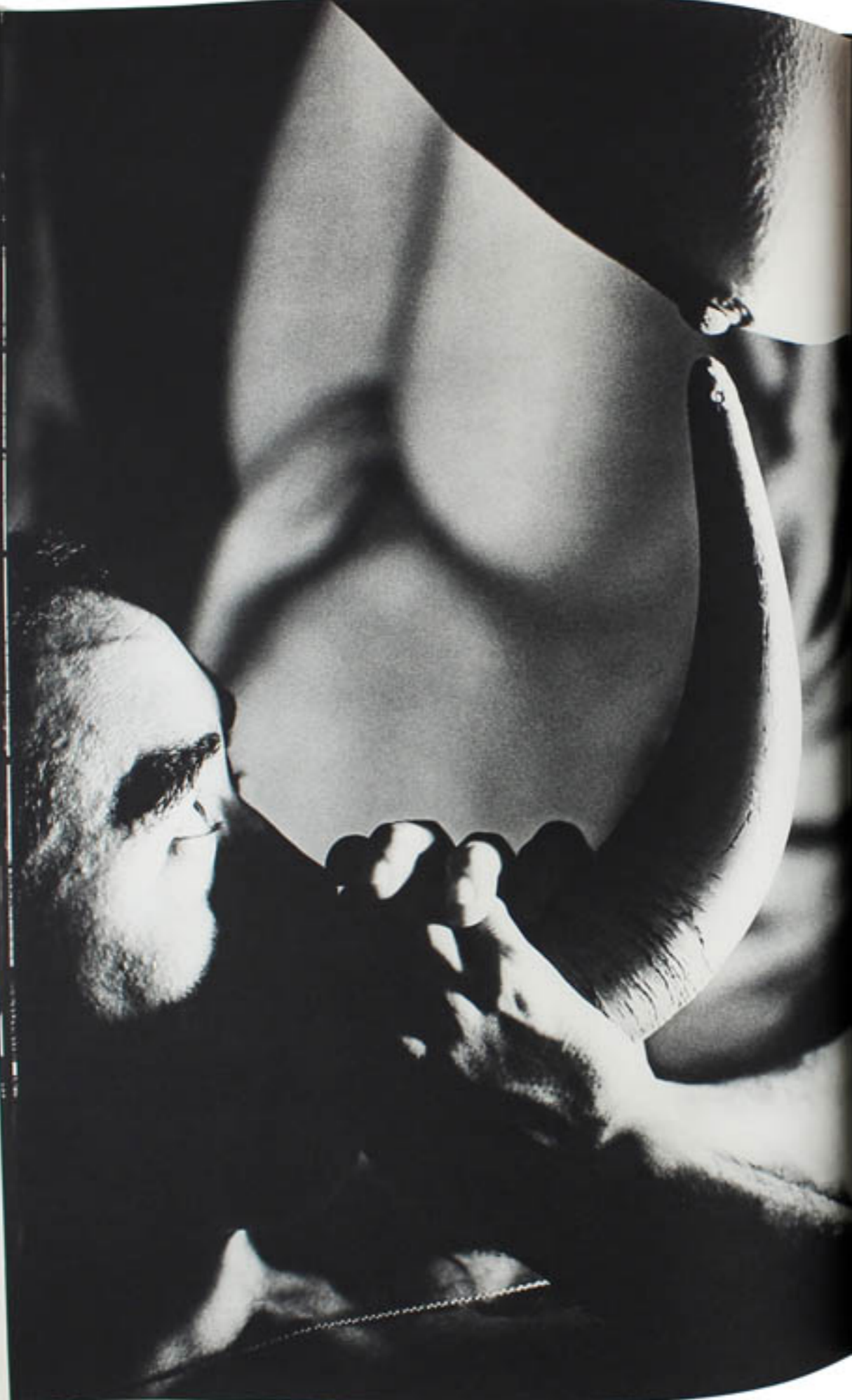
婦人の口は常に淨し。

果實を落さんとせる際の鳥も亦同様なり

積はその母牛の乳の流るる際は淨く、

犬は鹿を捕へたる時は淨し。

ウツロウ 鹿 鹿









ISBN 7-102-01111-1
定价：12.00元



われ嘗てアダムに命を下せり

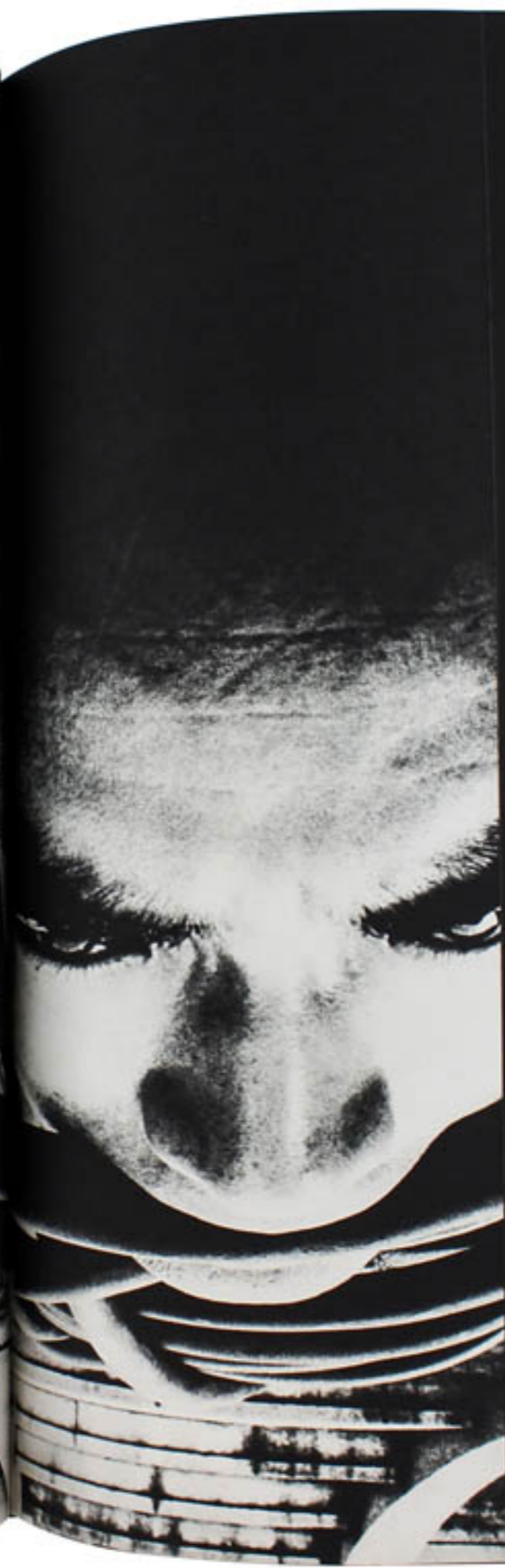
しかるに 彼

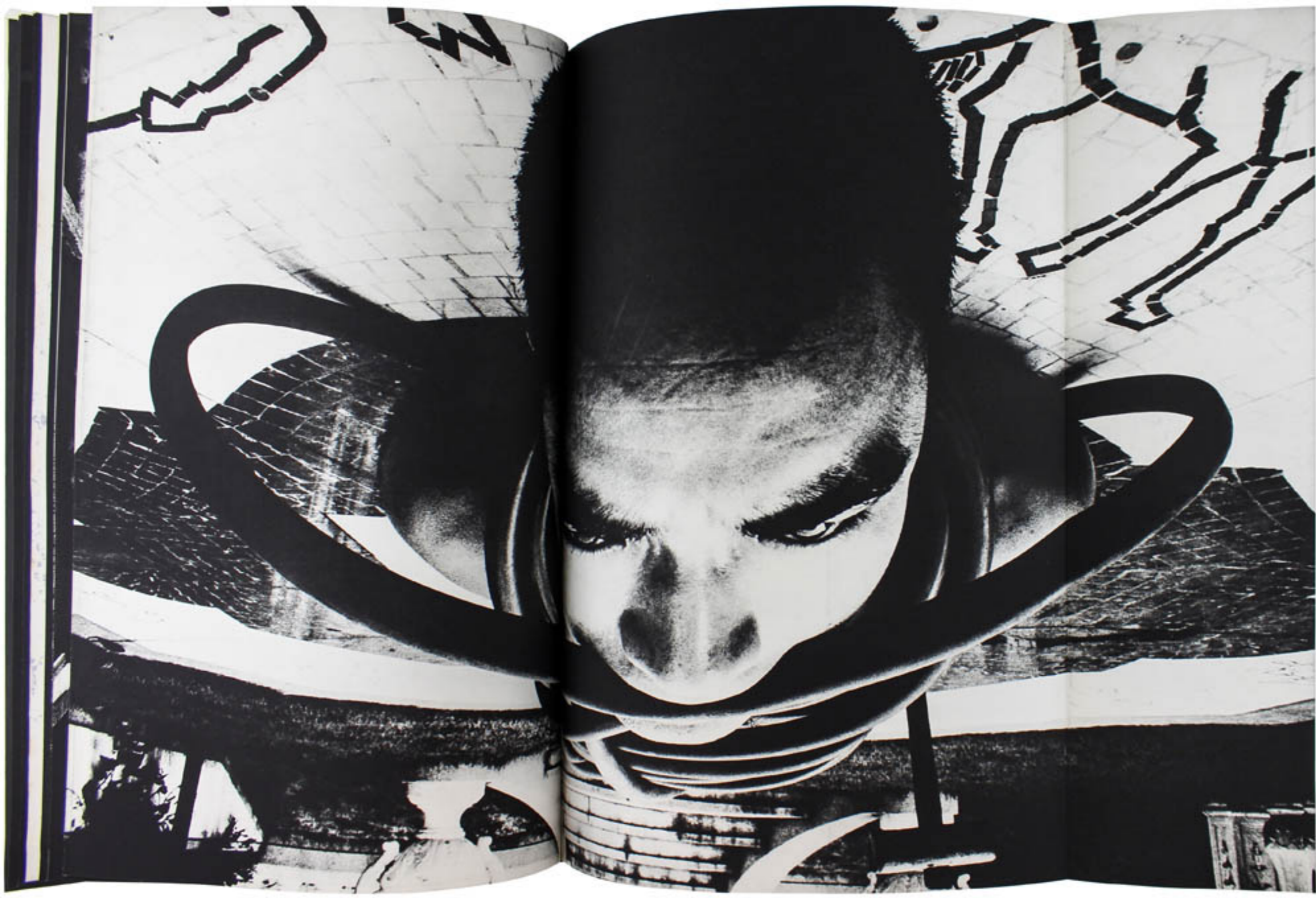
それを忘れて禁断の果實を喰ひたり

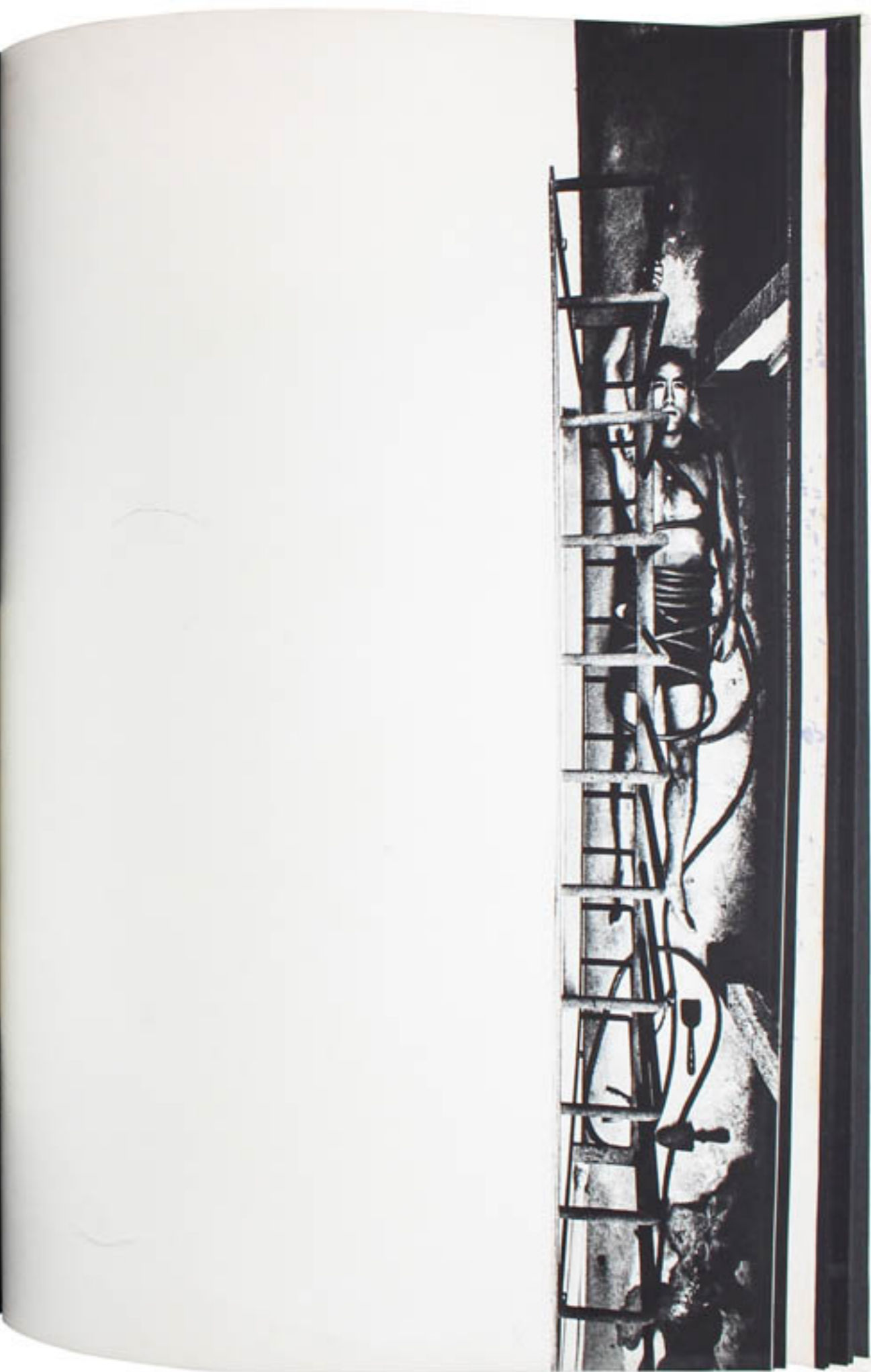
われ確信を彼に見ざりき

——コリン／＼タ・ハ／第六巻

第二章——嗤ふ時計 あるひは 怠惰な證人













不撓不屈にして温和、且つ忍耐強く、殘酷なる人々と交らず、而して生類に危害を加へざる者は、もし、絶えず、かくの如くに生活せば彼の感官の抑制、及び布施とによりて、天界の福社を得。

第二章——市民的日常生活

——市民の生活と市民の生活——

市民の生活

市民の生活

市民の生活

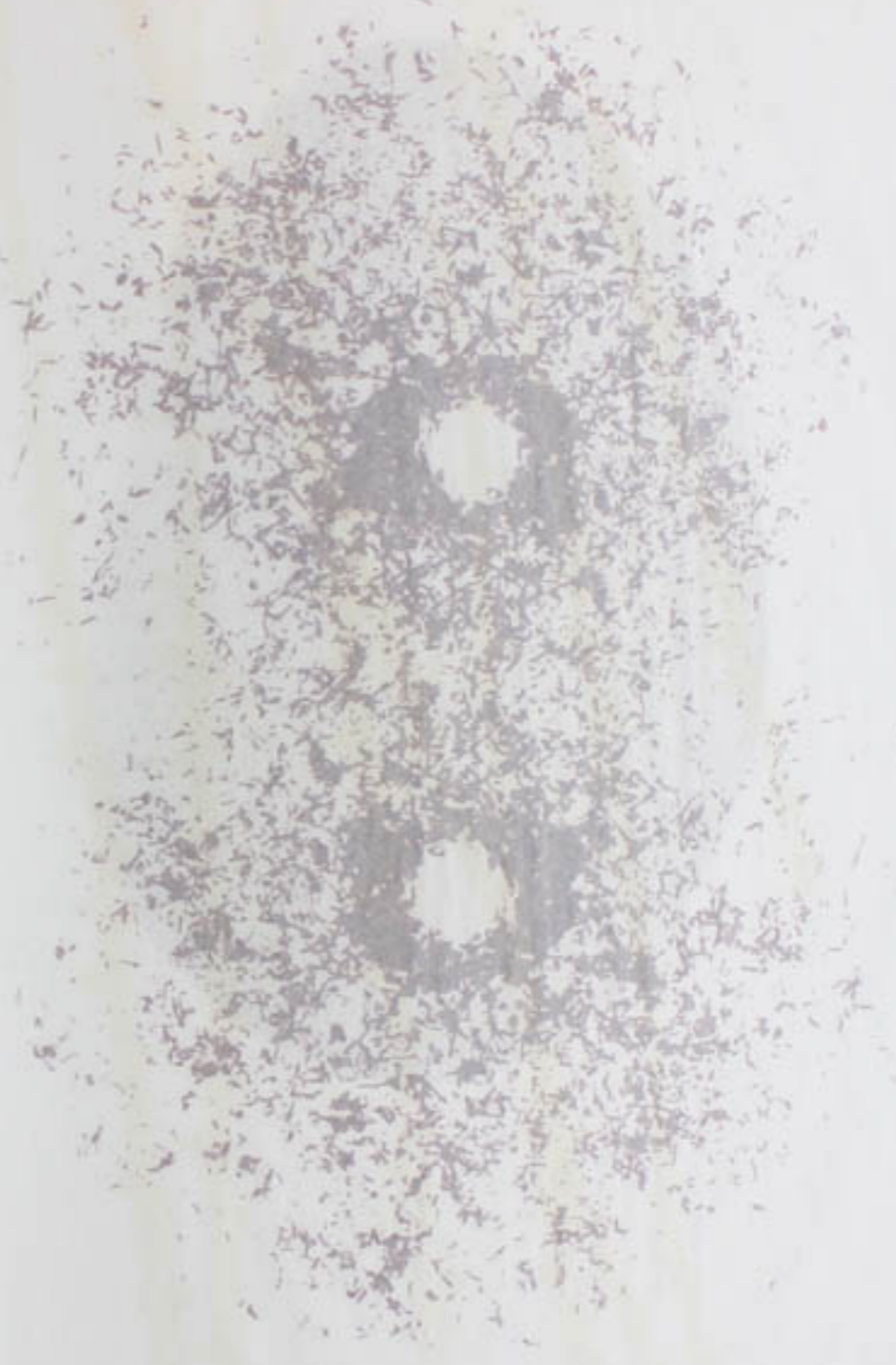
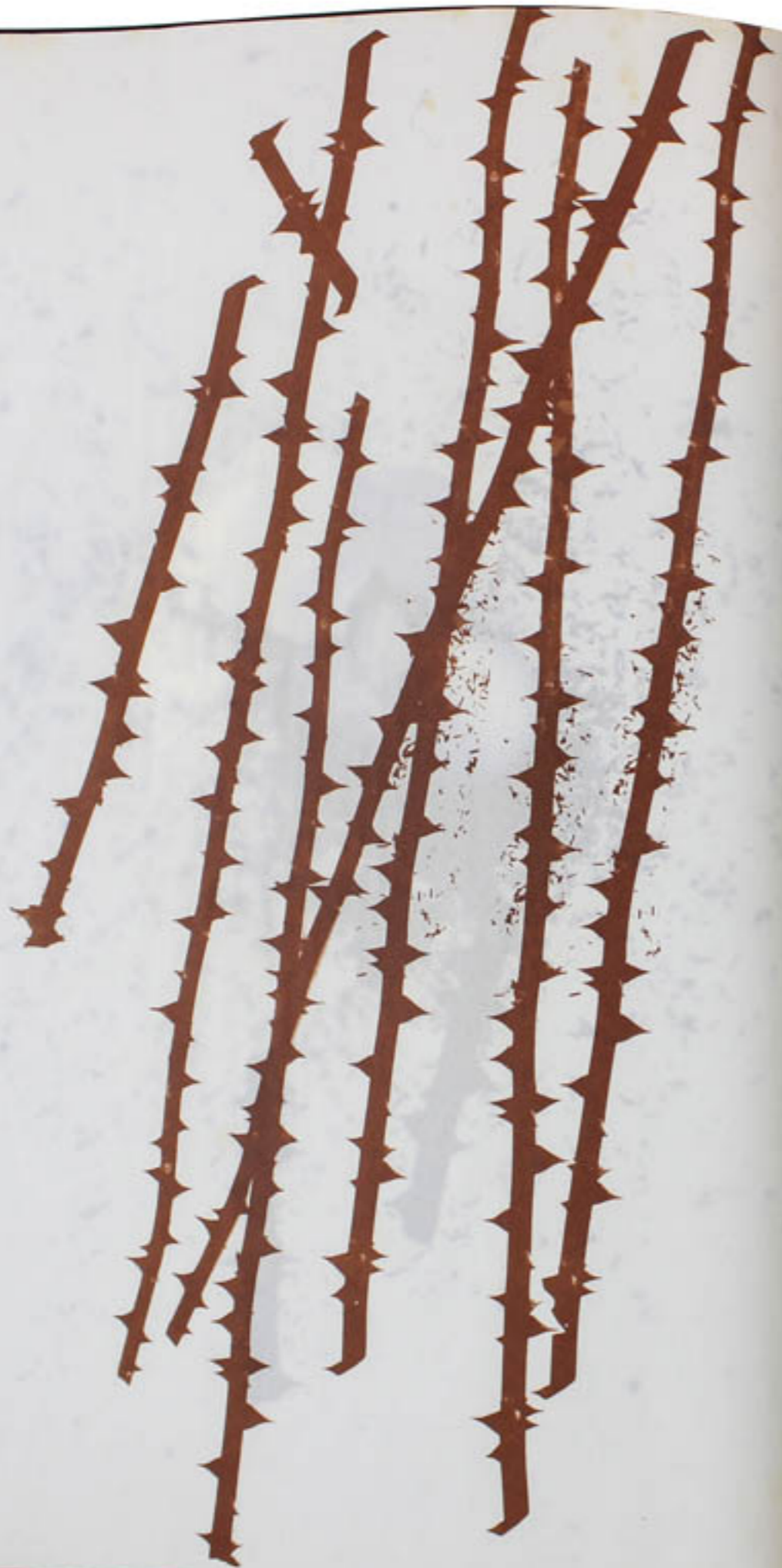
市民の生活



願ふ勿れ。歌ふ勿れ。樂語を奏する勿れ。手を鳴らす勿れ。書を執らす勿れ。興奮して奇聲を發する勿れ。









第一章——序曲

1118 P. 110. 117



は寫眞ですから、御覽のとはり唯いつはりはありません——といふ叫びのリフレインによつてのみ、生れてくることを暗示してゐる。この叫び、この證言こそ、氏自身の告白ではないだらうか。そして寫眞家の告白は、この千遍一律の證言によつてのみ、可能なものではなからうか。

だからこれらの作品には、客觀的な信憑性をみちんも持つことのできない證言の、かはそい、しかし熾烈なトレモロが慄へてゐる。何故君たちは信じないのか。これは寫眞なのに。何故君たちは信じないのか。これは僕の目の前で現實に起つたことなのに——寫眞といふ機械文明の産物、寫眞主義繪畫を壓倒し去つたほどの萬能の寫眞の王様が、このやうな逆説的な證言に使はれるやうになるのを、あの赤い裏地のラシヤ布をかけた箱型機械の寫眞師たちが、どうして豫想することができたであらう。これらの作品の孤獨は、ひとつひとつ別な音調で語られる同じ證言に基づいてをり、私はそれを、寫眞の詩と呼ぶのに躊躇しない。彼ははつきりとわが目で、未聞の變貌を眺め、それを證言したのだ。次に——おそらく餘計な——解説を加へることく、これらのことはたしかに現實に起つたのである。

この作品集は、一貫した主題の多くのヴァリエーションを豫め提示する 第一章 序曲からはじめられ、

第二章 市民的日常生活で、まことに堅實で善良で平均的な市民の、日常生活の氣遣が語られてゐる。しかしそれがこの氣遣が何を言ふことができたか、

あり、襟かの首にカラーを巻いて、それに黒いネクタイを括して定然と立つてゐたり、體にゴムホースを巻きつけて大理石モザイクの獸帯の上に倒れてゐたりする。これは堅實な市民が、七曜の或る一日、二十四時間のある數秒間に、必ず人知れず行つてゐる儀式なのだ。一人の例外もなく！

第三章 唯ふ時計あるひは怠惰な證人では、モデルは一轉して、譏笑者であり證人であることを強ひられる。彼はまづ大きな柱時計とテニスのボールを持つて、玩具の椅子の上に立ち、人間生活全般に對する嘲笑の權利を獲得する。彼は動かない時計の永劫の時間に互つて、ただ見るための存在になり、天井にひびく自分の甲高い嘲笑と、じんわりとした苦痛とにかはるがはる苛まれながら、人間の快樂や苦惱の、もつとも露はな狀況に立ち會はされる。しかし彼はただ嘆ひ、ただ見るだけで、何もしないのである。この懲罰はやがて襲つて來るが、その前に彼は、一時はしいままな變容の世界へ解放される。それが、

第四章 さまざまな瀆聖である。

神聖と官能との古い美的様式の中へ倒れかかり、これを足蹴にし、胎兒のやうにここから生れ、死屍のやうにここに埋もれて、やがてかうした瀆聖の戯れが、彼の肉體を透明にしてしまつたやうな錯覺に彼を陥れる。彼は風になつたと思ふ。今や時と空間を超えたあらゆる美的様式の中を、自由自在に通り抜け、一つの存在から別の存在へ、一つの生から別の生へ、何の市民的責任も免かれて、移りゆくことができるかのやうに思ふ。しかしかうした喜戲の果てには、

第五章 善惡刑の緩慢な處刑の苦痛が待つてゐる。

ここで殘酷な棘のある善惡の象徴が前面にあらはれ、拷問や果てしも知らないスロウ・デスが用意される。そして死と、暗い太陽への昇天で、この作品集は巻を閉ぢるのである。

しかし自分の目を信じない状況に置かれたのは私一人ではなかった！ 寫眞家としての氏自身がさうだつたのである。氏はフアインダーをのぞきながら、明らかに、被寫體と、被寫體をめぐつて起る變貌を待つてゐた。自分の目があることに裏切られる状況を精密に計算して準備すること、これを言ひかへれば、氏の潜在意識がすでに見てゐる原初的なイメージへみごとくに還歸できるやうな状況を計算して準備すること、それが氏の一貫した作業であつた。そのとき対象は決定され、固定され、時には文字どほり縛られて、撮影者と共に、丹念にしつらへられた儀式的状況の果てに起る不確定な變貌へ向つて捧げられてゐる。それは起る場合もあれば、起らない場合もあつた。そして私はいへば、凝視も瞑目も、拒否も容認も、全く同一の意味しか持たない客體の世界に身を置いてゐた。

寫眞といふものは、私には、それが藝術として成立つ以前に、記録性か證言性かいつれかを選ばなければならぬ宿命を持つと考へられる。どんな特殊レンズを用ひようと、対象がそれによつてどんなに歪められようと、カメラは何物をも直敘するほかに道を知らないから、どんなに抽象的な構圖がとられようと、直敘された物象の意味はそこに残り、そこに沈澱してゐる。寫眞家はこれを二者擇一の方法で濃し取り、藝術作品を作るのであるが、この二者擇一の濃し方が、すなはち記録性か證言性かなのだ。

報道寫眞の諸々の傑作は前者に屬してをり、寫眞家が現實から濃し取つた像は、或る事件であれ、その悲痛な人間の反應であれ、寫眞家自身がすでに一指も觸れることのできない客體的な信憑性を帯びてしまひ、物象の意味が純化されて、

これに反して、寫眞が證言性を進ぶときは、カメラによつて直敘された物象の意味は、濃し取られ、幾分かを失ひ、幾分かを歪められ、それが作品の形式となるやうに馴化される。そして作品の主題は何かといふのに、寫眞家が、ただ主觀的判斷を以て表白する、

——これは本當です——

——これは寫眞ですから、御覽のとほり、嘘いつはりはありません——
——といふ證言だけにかかつてゐるのである。

細江英公氏の藝術は、この證言性の極致であつて、右の定義は、以下のやうな具體的例證に當てはめられる。

もしここに一輪の薔薇があるとす。薔薇は、世界中の大多數の人間が腦裡に抱いてゐる薔薇といふ一般的概念をはじめ、産地や種別や形態や色彩の、特殊な意味を荷つてをり、カメラのレンズはその意味ごと薔薇を直敘する。そして證言性の濃し取り作業の経過において、歪められ弄ばれるのは、實は薔薇の映像ではなくて、薔薇の意味にすぎない。記録的性格の寫眞では、この意味が作品の主題となる筈だが、證言的性格の寫眞では、薔薇の意味は、形式となるために變形され馴化される。つまりそれは、「宮殿建築としての薔薇」であつたり、「象によく似た薔薇」であつたり、「子宮的薔薇」であつたり、「陽物的薔薇」であつたりしはじめ。しかし象や子宮は、作品の主題ではなくて、形式である。主題は細江氏の次のやうな證言にだけかかつてゐる。

——これが本當の薔薇です——

——これは寫眞ですから、御覽のとほり、嘘いつはりはありません——

——ここにはすべてのインキな心靈寫眞や、首をすげかへられた春畫寫眞の裏にひそむ哀切な抒情性の發見があり、その極度に高められた形があつて、寫眞藝術の異様な氣味のわるい抒情性が——これが本當の幽霊です——これ

或る日のこと細江英公氏がやつて来て、私の肉體をふしぎな世界へ持し去つた。それまでも私はカメラの作りだす魔術的な作品を見たことはあつたが、細江氏の作品は魔術といふよりも、機械による魔術の性質を帯びてをり、この文明的な精密機械の極度に反文明的な使用方法であり、私とそのレンズの魔術によつて連れ去られた世界は、異常で、歪められて、嘲笑的で、グロテスクで、野蠻で、汎性的で、しかも見えない暗渠の中を、抒情の清冽な底流がせせらぎの音を立てて流れてゐるやうな世界なのであつた。

いはばそれはわれわれの住んでゐる世界とは逆で、われわれが世間的な體面を尊び、公衆道徳と公衆衛生に意を須ひ、従つてその地下に醜惡汚穢な下水道をうねらせた世界に住んでゐるのに反して、氏が私を持し去つた場所は、裸かで、滑稽で、陰惨で、殘酷で、しかも裝飾過多で、目をおほはせるほど奇怪な都市でありながら、その地下道には抒情の澄明な川水が、盡きることなく流れてゐるのである。

さうだ。私が連れて行かれたのは、ふしぎな一個の都市であつた。どこの國の地圖にもなく、おそろしく静かで、白晝の廣場で死とエロスがほしいままに戯れてゐるやうな都市。——われわれは、その都市に、一九六一年の秋から、一九六二年の夏まで滞在した。これは細江氏の、カメラによるその紀行である。

細江氏のカメラの前では、私は自分の精神や心理が少しも必要とされてゐないことを知つた。それは心の躍るやうな経験であり、私がいつも待ちこがれてゐた状況であつた。小説家が言葉を使ひ、作曲家が音を使ふやうに、氏はカメラを媒體として、被寫體の置かれる状況の多様な組合せと、この組合せを可能にする光りと影とを駆使するのであつた。つまり氏の使ふ言葉、氏の使ふ音はかうだつたのである。対象の持つ種々な意味を剥脱して、無意味な配列の内へ投げ込み、この無意味の相互の反映が、一定の光りと影との秩序を回復すること。そこではじめて言葉や音のやうな、作品の構成要素の抽象性が獲得されるが、そのためには、前提要件として、対象がまづ剥脱されるべき意味を持つてゐなければならぬ。そこでモデルはへんでこりんな小説家であることが必要であり、背景はルネッサンス繪畫や西班牙バロックの家具であることが必要なのである。それは従つて諷刺やパロディの手續ではなく、氏獨特の抽象化の手續である。ジョルジョーネの「眠れるヴェーナス」やボティチエリの「ヴェーナス誕生」が使はれても、ダリが「晩鐘」の偏執狂的パロディを描いたのとは意味がちがつてゐる。寫眞家が、他のジャンルの藝術家のやうに、自分の精神の代替物としての作品を作るためには、言葉や音のやうな既存の抽象的構成要素の代りに、かうしてまづ抽象化の手續からはじめなければならぬ。

そこで被寫體の外面の明確な定義づけがはじめて行はれ、モデルの目が目であり得、モデルの背中が背中であり得るやうな状況が設定される。氏のカメラの前では、かくして當然のことながら、私は自らカメラのレンズを凝視すること、カメラへ完全に背中を向けることも、同一の意味しか持たないやうに訓練された。私の背中の内と、私の網膜と、共に私の外面であることにはがりがな

いなら、私が見るといふことが、そもそも何を意味しよう。

knitted by rose

photography by edith hauer

model and introduction by yoko mizuno



薔薇刑

hōka ni eipykas.

細江英公寫真集

披寫體および序文、三島由紀夫

表紙裏表および序文、三島由紀夫